

延喜二年[921]

★一摂津住吉に、阿部保名と葛の葉姫という夫婦がいた。妻のからだが弱いので保名が信太明神に祈願すると、獵師に追われた白狐が来たので助けた。まもなく男児が生まれたが、ある日、助けた白狐が妻と入れ替わっていることが露見した。狐は信太明神の神旨で妻になったと語った。(旅と伝説)

延喜年間[901-923]

★ある年の五月、鞍馬寺の峯延和尚が、雷のような目で、火炎のような舌の大蛇に襲われたので、大威徳明王の法や毘沙門の呪を唱え、蛇は倒れた。三日後に人夫五十人で大蛇を切り、静原山の奥に捨てた。(年中故事)

★仁壽殿の露油の燈油を毎夜半に取りにくる怪しいものを、源公忠が追い払った。(今昔物語集)

★五條の天神あたりの柿の木の上に仏が出現し、花を降らせ光を放っていたが、右大臣によってその正体が屎鳶であることを見破られ、子どもたちに打ち殺された。(宇治拾遺物語)

延長元年(延喜三年、水潦、疾疫により四月改元)[923]

★菅原道真が幽霊となって、叡山延暦寺の座主の前に現れた。(和漢三才図会)

延長二年[924]

★大和国に八足の兎あり、その前足は背中から出ていた。(前々太平記)

延長五年[927]

……927「延喜式」の撰上

★四月三日 北山で野穀が簇生し、人々は争ってこれを穫った。(大日本史)

延長六年[928]

★八月 陸奥国伊具郡東光院の安珍が熊野修行に赴き、真砂の清姫に恋慕される。安珍は道成寺の鐘の中に隠れたが、大蛇と化した清姫にとり殺され

る。(宮城縣史)

延長七年[929]

★四月五日 宮中に鬼の足跡があり、牛のそのようで、青色、また赤色をしてゐた。(古今著聞集)

延長八年[930]

★三月八日 兵庫が自然に鳴ったので、占いを行った。(大日本史)

★六月五日 三位一人、五位一人が、宇多院の隨身、近衛右近の陣に入ったが、見るほどに消えてしまった。鬼の仕業だという。(古今著聞集)

★六月六日 菅原道真の亡霊が、雷となって宮中に落ち、藤原一門の公卿を殺し、死霊となって時平に祟った。時平は、耳から蛇が出て悶死した。(北野縁記)

★七月五日夜 右近衛下野長用が、武徳殿のあたりで鬼に出会う。怖れて戻り、先のあたりを見ると、火百余を灯すのが見えた。(古今著聞集)

★七月十日 黒雲、西南から起り、龍の尾が現れ、やがて風が吹くと、大蛇が落ちて家を壊したが、蛇は消えてしまった。(古今著聞集)

01 葛の葉▽歌舞伎の「蘆屋道満大内鑑」でも知られる、いわゆる信太妻伝説だが、このような入れ替わり、ないしは助けた狐の化身が保名の妻となったというのが、基本的なパターン。生まれた男児が、後の安倍晴明である。

02 源公忠889-949▽三十六歌仙の一人。鷹狩の名人として知られる。

03 今昔物語集一に、寛平元年889頃の類話あり。

04 安珍清姫伝説▽鐘が焼けて、安珍は焼き殺された。以来鐘は亀裂が入り音が出なくなり、改鑄しようとした男は熱病にかかった。ただし安珍の名は「元亨釈書」(1322)が初出で、清姫の名は一七四三年に上演された浄瑠璃が初見。日高

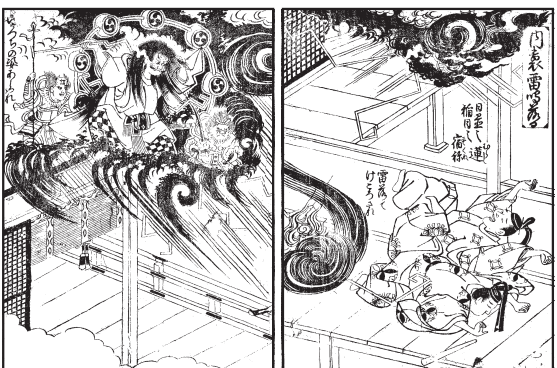
川草紙では、主人公は三井寺の僧、賢学となっており、遠江国の長者の娘、花姫と結ばれる運命を知り、修行の妨げとなることを恐れ、花姫の胸を刺して逃げ、その後賢学は目惚れした娘と結ばれるが、彼女の胸の傷から成長した花姫その人であることに気づき、彼女を捨てて熊野へ向かう。花姫は彼を

道成寺
うろこが肌
ぬぎ仕廻

『俳風柳多留』



▷右 月岡芳年『新形三十六怪撰』より「葛の葉きつね童子にわかるるの図」。
▷左『絵本天神御一代記』より「内裏落雷」。



追い、ついに蛇となって日高川を越えて追いますが、とある寺に逃げこんだ賢学は鐘の中に匿われるが、蛇と化した花姫は鐘を破壊し、賢学とともに川へと消えた。

05 菅原道真885-923▽没したのは延喜三年二月三日であり、延喜三年923の醍醐天皇の皇子保明やすきら親王薨去、延喜三年の

保明親王の皇子藤原主よしちかおの逝去、また承平三年933に藤原時平の長男、保忠が没したことなどが道真怨霊説の根拠になった。ことに延長八年の清涼殿落雷事件が決定的だった。落雷で死んだのは大納言の藤原清貴きよたか。ただし時平が死んだのは、この落雷事件以前の延喜九年。